ウィリアム・ジェイムズ『真理の意味「プラグマティズム」続編』訳解(1)

大　厩　　諒

凡　　例

- 本稿は米国の哲学者ウィリアム・ジェイムズ（William James: 1842–1910）の『真理の意味』の抄訳第一弾である。底本には、*The Meaning of Truth: A Sequel to 'Pragmatism.' The Works of William James*（Gen. ed. Frederick Burkhardt, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975）を用いた。
- ジェイムズは1906年末から翌年初めにかけて、ボストンとコロンビアで自身の哲学的方法論と世界像について講義し、これを1907年春に『プラグマティズム』として公刊した。このなかでジェイムズが真理を「有用性」や「満足」、「便宜性」といった概念によって規定したことをめぐって、大きな論争が生じた。ジェイムズは自説に寄せられたさまざまな批判やいわれのない誤解に応答するため、真理論に関連する諸論文を一冊にまとめ、『真理の意味 「プラグマティズム」続編』と題して発表した。
- 今回訳出したのは、ジェイムズの真理論の概要が簡潔に述べられた「序文」と、第2章「インドの虎」、第9章「真理という語の意味」、第10章「ユリウス・カエサルの存在」の四編である。訳出に際しては、岡島亀次郎訳「眞理の意味」（『世界大思想全集40』所収、春秋社、1931年、1–153頁）および植木豊編訳『プラグマティズム古典集成――パース、ジェイムズ、デューイ』（作品社、2014年）を参照した。
- 文中のパーレン（　）およびブラケット［　］は底本に従った。
- 引用中の［…］は底本における引用の省略を表す。
- 亀甲括弧〔　〕内の補足は訳者によるものである。
- 【　】による小見出しは訳者の判断で追加したものである。
- 底本におけるイタリックによる強調は下線で再現した。ただし、原文のイタリックが強調以外の目的で施されている場合（ラテン語の成句など）はこの限りではない。
- 原文の構造が複雑な場合には、訳文をわかりやすくするためにしばしば原文に

ない二倍ダーシ――を挿入した。他方で原文のダーシ（em dash）は、訳文では二倍ダーシによって再現したが、煩雑さを避けるために再現しなかったケースもある。

- *は原註を表し、当該段落のあとに配置した。
- 上付き数字は訳註を表し、脚註として配置した。なお訳註の作成に当たっては、底本の編者註および以下の文献を参照した。Perry, Ralph Barton.［1935］*The Thought and Character of William James.* 2 volumes. Boston: Little, Brown & Co..

序　　文

【『プラグマティズム』の真理論の要約】

私の著書『プラグマティズム』[1)]の中心をなす部分は、ある観念（意見、信念、言明など）とその対象とのあいだに成立しうる「真理」と呼ばれる関係についての説明である。この書のなかで私は、「真理とは、われわれの観念のうちの或るものが持つ特性である。虚偽がそうした観念と実在との不一致を意味するのと同様に、真理はそうした観念と「実在」との「一致」を意味する。プラグマティストも主知主義者も、この定義を当然のこととして承認する」〔P 96: 197〕と述べた。

「われわれの観念がその対象を明確には模写し［てい］ない場合、対象との一致とは何を意味するのか。［…］プラグマティズムはお得意の質問を発する。「ある観念ないし信念が真であると仮定すると、それが真であることによって現実の生にどのような具体的差異がもたらされるのか。信念が誤っていた場合に得られる経験と、どのような経験の異なりがある［ことになる］のか。真理はどのようにして実現されるのか。要するに、経験的な観点から見た場合、真理の現金価値とはいかなるものなのか」と。プラグマティストは、この問いを発するや否や、こう答える。真なる観念と

1）*Pragmatism*.［1907年初版］*The Works of William James*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1975（『プラグマティズム』桝田啓三郎訳、岩波文庫、2010年［改版］）．以下、Pと略記し、原書頁：邦訳頁によって引用箇所を示す。引用箇所の訳出に際しては既存の邦訳を参照したが、地の文との兼ねあいなどの理由から変更を加えた箇所もある。この点は他の文献に関しても同様である。

は、われわれが同化し、妥当化し、確認し、真理化できる観念のことであり、偽なる観念とは、われわれがそうできない観念のことである、と。これこそ、真なる観念を持つことによってわれわれにもたらされる実際的な差異であり、したがって真理の意味なのである。真理がそれとして知られる内容は、以上のことのほかにないからである」〔P 96-97: 198-200〕。

「ある観念の真理とは、その観念に内属する不動の特性などではない。真理は観念に対して生じてくるのである。観念は真になり、出来事によって真にされる。観念の真理性とは、実際、ある出来事、過程――観念がみずからを真理化する〔verifying〕過程――であり、観念が真なる観念とされること〔veri-*fication*〕なのである。観念の妥当性とは、観念が妥当なものとされる〔valid-*ation*〕過程なのである」〔P 97: 201〕[*1]。

[*1] しかし、私は次のように補足する。「「真理化可能性」は、〔実際の〕真理化と同然である。完結した真理過程ひとつに対して、われわれの生のなかにはまだ発生しかけの状態で機能しているものが無数にある。こうした発生しかけの真理過程は、われわれを直接的真理化に向けて導き、それらが予想する対象の周囲へとわれわれを導く。その際、万事滞りなく進行するならば、われわれは真理化が可能だと確信するがゆえに真理化を省く。しかもたいていの場合、生じてくるあらゆる出来事によってこの省略は正当とされるのである」〔P 99-100: 207〕。

「実在と一致するとは、最も広い意味では、まっすぐに実在まで、あるいは実在の周辺まで導かれるということか、それとも、実在ないし実在と結びついた何ものかを、一致しなかった場合よりもうまく扱えるような、実在との働きにおける接触に引き入れられるということか、そのいずれかを意味するばかりである。よりうまく扱えると言ったが、これは知的にもまた実際的にもそうなのである！［…］われわれが実在やそこに属するものを実際的あるいは知的に取り扱うのに役立つような観念、われわれの前進を妨害したり頓挫させたりすることのない観念、実際にわれわれの生を実在の仕組み全体に適合させ、順応させるような観念は、導きの過程という要求を満たすに足りるだろう。そのような観念はその実在について真で

あるだろう」〔P 102: 212-13〕。

「ごく簡単に言えば、真なるものとはわれわれの思考様式における便宜的なものにほかならず、それはちょうど正義というものがわれわれの行動様式における便宜的なものであるのと同様である。それはほとんどどのような思考様式についても便宜的なものであり、もちろん長期的に見ても全体として見ても便宜的なのである。なぜなら、目の前のすべての経験に便宜的に見合うものが、必ずしも将来の経験すべてに等しく見合うとは限らないからである。われわれが知っているように、経験とはさまざまな仕方で煮えこぼれ、われわれの現在の公式を修正させていくのである」〔P 106: 222-23〕。

【本書の企図】

真理についての以上の説明は、デューイ、シラー[2)]両氏が述べた同様の説明に続いて登場したもので、大変活発な議論を引き起こしている。この説を擁護した批評家はほとんどおらず、大半はこれを鼻であしらっている。一見単純そうに見えるが、この〔真理という〕主題が実は理解しがたいものであることは明らかであろう。また、この問題に決定的な解決が与えられたとすれば、認識論の歴史、ひいては哲学全般の歴史の画期となることも明らかであろう。今後この問題を研究する必要に迫られる人たちが私自身の考えにより近づきやすくなるように、私は自分が書いた真理の問題に直接関係するすべての仕事を本書に収録した。私がこの問題を最初に論じたのは 1884 年であり、これは本書の巻頭論文として収められている。それ以外の論文は発表順に配置した。このうち二、三の論文は今回が初出である。

2）Ferdinand Canning Scott Schiller（1864-1937）：英国の哲学者。英国におけるプラグマティズム、ヒューマニズムの主唱者。ジェイムズは『プラグマティズム』第 1 講において、シラーの著書 *Studies in Humanism*（London: Macmillan, 1907）に言及している。両者の関係については Perry〔1935〕vol. 2, ch. 80 を見よ。

【プラグマティズムの真理論における絶対者の価値】

私が最も頻繁に直面しなければならなかった非難のひとつは、われわれが有する宗教的信念の真理の本領は、当の信念がわれわれにとって「よいと感じられること」に存するのであって、それ以外にないとした点である。『プラグマティズム』のなかで、ある哲学者たちが抱く絶対者への信念の真理性について私が語る際に用いた不用意な言葉によって、この非難にいくらかの口実を与えてしまったことを私は後悔している。私自身、自分がどうして絶対者を信じないのかを説明する一方で〔P 43: 86-87〕、絶対者は「道徳的な休暇」を必要としている人に対してそれを保障できるかもしれないし、その限りで（つまり道徳的な休暇を取ることが善いことであるならば）真であると考えたので[*2]、この論点を和平の申し出として私の敵たちに提示したのだった。しかし、そうした申し出にまったくありがちのこととして、彼らは足下で贈り物を踏みにじったばかりか、それをずたずたに引き裂いて贈り主に突き返してきた。私は彼らの善意を信頼しすぎていた――天が下にあってキリストの慈愛など稀有だというのに！　それどころか、通常の世俗的知性もまた稀有だというのに！　宇宙に関する二つの競合する見方があり、これらは他のすべての点では同じであるが、第一のものは人間の不可欠な要求を否定し、第二のものは当の要求を満足させる場合、世界をより合理的に見えるようにするという単純な理由に基づいて第二のものが健全な人間に好まれるだろうということを、私は当たり前だと思っていた。このような状況であえて第一の見方を選ぶのは禁欲的な行為であり、まともな人間であれば決して侵さない哲学的な自己否定であろう。概念の意味に対するプラグマティックなテストを用いることで、私は絶対者という概念の意味内容が、道徳的休暇を与える者、つまり宇宙の恐怖を払いのける者以外のいかなるものでもないと示した。「絶対者は存在する」と言われるとき、私の主張では、この言明の客観的内容はただ次のことだけである。すなわち、「宇宙を前にして安全だという感じを持つことの何らかの正当化」が存在するということ、そして、安全だという

感じを養うことをまるごと拒否するとすれば、それは、未来を見とおすものとして尊重されるような、感情的生活のなかに見られる傾向性を害することになるだろうということである。

*2『プラグマティズム』p. 75〔P 41-42: 81-82〕.

どうやらわが絶対主義的批評家諸氏は、自分たちの心の動きをこのような描写において眺めることができないようである。だから私にできることは、彼らにお詫びをし、〔絶対者を道徳的休暇を与える者として考えようという〕私の申し出を引っ込めることだけである。そうなると、絶対者はいかなる仕方でも真ではなく、何よりも、批評家たち〔自身〕が下した評決によって、私が提示したような仕方では真でないことになるのだ！

「神」や「自由」、「設計」〔という概念〕に関する私の扱いも同様であった。私はプラグマティックなテストによって、これらの各概念を明確に経験可能な働きにまで還元し、これらはすべて同一の事柄を、すなわち世界には「約束」が現に存在することを意味するということを示した。〔たとえば〕「神は存在するか否か」という問いは「約束が存在するか否か」を意味する。この二者択一は十分に客観的なものであるように思われる。なぜならこれは、たとえわれわれ自身の暫定的な回答が主観的根拠に基づいてなされようとも、宇宙があれこれの特性を持つか否かに関する問いだからである。にもかかわらず、キリスト教徒の批評家もそうでない批評家も同じように私を非難して、私が人々に、神が存在しない場合でさえ「神は存在する」と言うようにそそのかしている――なぜなら私の哲学においては、そのように言うことの「真理」は、いかなるかたちであれ神が存在するということをまったく意味しておらず、そのように言うことがよいと感じられるということを意味するのだから――と述べるのである。

【プラグマティズムと徹底した経験論】

プラグマティストと反プラグマティストとの抗争の大半は、「真理」という語が何を意味すると考えられるかをめぐるものであって、真理が問題となる状況に埋め込まれた事実をめぐるものではない。なぜなら、プラグマティストも反プラグマティストも、対象に関するもろもろの観念を信じているのと同様に、現に存在するもろもろの対象を信じているからである。両者の違いは、プラグマティストが真理について語るときは、もっぱら観念に関する何か――すなわち観念の働きの可能性――が意味されているのに対して、反プラグマティストが真理について語るときには、ほとんどの場合対象に関する何かが意味されているように思われるという点にある。プラグマティストは、観念が「本当に」真であると同意するとき、観念がその対象について語ることのすべてにも同意している。それに加えて、反プラグマティストの大半は、当の対象が存在しているならば、その対象が存在するという観念が働きうるということにすでに同意するようになっている。それゆえ、〔両者のあいだに〕論争すべき点はほとんど残されていないように思われるので、〔真理という〕言葉をめぐるこれほどまでにたくさんの言い争いに占める私の持ち分を再録などせずに、そんなものは全部焼き捨ててしまうことで私の「価値」観を示さないのはなぜなのか、と尋ねる人がいるかもしれない。

そのような問いももっともだと思うので、私は自分なりの答えを与えたいと思う。私は、プラグマティズムとは別の、徹底した経験論〔radical empiricism〕と名づけた哲学説に興味があり、私の考えでは、プラグマティズムの真理論の確立は、徹底した経験論を普及させるうえで最も重要な第一歩をなす。徹底した経験論は第一に要請、次に事実についての主張、最後に一般化された結論から構成される。

徹底した経験論の要請とは、哲学者たちのあいだで論争されるべき唯一の事柄は経験から引き出された語彙によって定義できるものでなければならないということである。［経験不可能な本性を持つ事物は、勝手気まま

には存在するかもしれないが、哲学的論争の題材としては何ら占める位置を持たない。〕

事実についての主張とは、事物同士の関係が、連接的であれ離接的であれ、直接的で個別的な経験に関わるものであり、その点では事物それ自身と少しも変わらないということである。

一般化された結論とは、以上のことから、経験の諸部分がそれ自体経験の一部であるもろもろの関係によって次々に結合されているということである。つまるところ、じかに把握された宇宙は、〔経験の部分同士を〕結合するための外来の超経験的支えなどまったく必要としないのであって、かえって、宇宙は連結された、あるいは連続的な自前の構造を有しているのである。

【合理論者の真理観との比較】

徹底した経験論に対して現代の人々が覚える大きな障害は、直接に与えられるものとしての経験がすべて離接的であって、どれも連接的ではなく、こうした分離状態からひとつの世界を作り出すには高次の統一作用が存在しなければならないという根深い合理論者の信念である。この統一作用は、一般に流布している観念論において、「カテゴリー」をまるで網のように事物の上に投げかけることでそれらを一緒に「関係づける」、あらゆるものの目撃者たる絶対者として表象される。こうしたカテゴリーすべてのなかで、おそらく最も特異かつユニークなものが真理関係であると想定されている。これは、実在の部分同士をペアにして結びつけ、一方を知るもの、他方を知られるものとするが、真理関係それ自体は経験的な内容を持たず、記述することも説明することも下位の名辞に還元することもできず、ただ「真理」という名前を口にすることによってのみ示すことができる〔と主張される〕。

こうした合理論者の見解とは反対に、真理関係についてのプラグマティストの見解は、この関係が明確な内容を有しており、この関係内のいかな

るものも経験可能だというものである。この関係のあり方全体は、経験的にはっきりした用語で語られることができる。観念が持たなければならない「働きの可能性」とは、観念が真であるためには、物理的であれ知的であれ、あるいは現実的であれ可能的であれ、それが具体的経験の内部で次から次へと作り出しうるような特殊な働きを意味する。以上のプラグマティズムの主張が受け入れられるならば、徹底した経験論の勝利においても大きな得点となるだろう。なぜなら、対象とそれを正しく知っている観念との関係は、合理論者によれば、このように記述可能な類のものでは全然なく、あらゆる可能な時間的経験の外にあるものとされるからである。そして、このように解釈された真理関係に基づいて、合理論は最も頑なな最後の反撃を仕掛けてくるのである。

【真理と働き】

さて、私が本書で迎え撃とうとしている反プラグマティズムの主張は、合理論者によって、プラグマティズムばかりか徹底した経験論に対する抵抗の武器としても容易に用いられうる（というのは、真理関係が超越的なものだとすれば、ほかの関係もそうでありうるからである）。だから私は、こうした主張に決然と応戦し、駆逐しておくことの戦略的重要性を強く感じている。われわれの批判者たちが最もしつこく述べているのは、なるほど働きは真理に伴いはするが、だからといって働きが真理を構成するのではないという点である。真理はもろもろの働きとは数的に別個の付加物であり、働きに先行し、働きに関する説明を与えはするが、決して働きによって説明されるものではない、とわれわれは絶えず言われる。したがって、われわれの論敵たちがまずもって確立すべき論点は、観念の真理がその働きに先行し、それとは数的に別個で付加的な何かが必然的に伴うということである。観念の対象は付加的であり、たいてい観念に先行しているので、ほとんどの合理論者はこの対象に訴えて、われわれ〔プラグマティスト〕が対象を否定したと言って大胆にも非難する。これによって傍から見てい

る人は、真理に関するわれわれの説明が崩壊し、わが批判者によってわれわれがこの領域から追い出されたという印象を受ける――というのも、そうした対象が現実に存在することを理に適った仕方で否定することなどできないからである。私は本書のさまざまな箇所で、われわれが〔対象の〕実在的存在を否定しているという誹謗中傷を論駁しようと思うが、ここで強調のためにもう一度言っておきたい。対象についての観念がみずからを「真だ」と主張しているときはいつでも、当の対象についての観念が成功裏に働く――いやしくもそれが働くものであれば――唯一の理由は、無数の場合において、当の対象の現実存在である。さらに、働きのない観念の虚偽が、働きのある観念の真理と同様に、当の対象の現実存在によって説明されるからといって、「真理」という語〔の適用範囲〕を観念から観念の対象の現実存在へと移してしまうことは、ごく控えめに言っても言葉の濫用であるように思われる、と。

こうした濫用は、最も学識ある論敵たちのあいだに広く見出される。しかし、いったん適切な言語的習慣を確立し、「真理」という語が観念の一特性を表すようにし、真理を、知られる対象と謎めいた仕方で結びついた何ものかとすることをやめてみよう。そうすれば、私の信じるところでは、徹底した経験論の是非をめぐる議論への公明正大な道が開けることになる。そのときには、観念の真理はもっぱらその働きを、いいかえれば、観念のうちにあり通常の心理学的法則によってそうした働きを引き起こすものを意味することになるだろう。観念の真理は、観念の対象を意味するのではないし、観念の内部にある「跳躍的な」もの[3)]、経験から引き出された名

3）「跳躍的〔saltatory〕」は、ジェイムズが伝統的な対応説的真理観を特徴づけるのに用いる語である。対応説によれば、真理とはわれわれの内側にあるもの（観念、表象など）が、いわばみずからを超え出て外側のもの（対象、実在）と非時間的に一致することである。真理は、両者のあいだにある断崖を「決死の跳躍〔*salto mortale*〕」によって飛び越えることであり、この跳躍の成否は非経験的な仕方であらかじめ決まっている。これに対してジェイムズは、本書の多くの章および『プラグマティズム』第 6 講、『徹底した経験論論集』第 2 章「純粋経験の世界」（伊藤邦武編訳『純粋経験の哲学』、岩波文庫、2004 年所収）

辞によっては記述できないいかなるものでもないのである。

【デューイおよびシラーとの対比】

この序文を終える前にもう一言述べておきたい。ときとして、デューイとシラー、そして私のあいだにひとつの区別[4)]が置かれることがある。それは、私が対象の存在を想定している点において、より徹底したプラグマティストである二人が拒否する通俗的な偏見に対して譲歩しているかのように見えるということである。〔けれども〕私がこの二人の著者を理解する限りでは、われわれ三人は、真理関係において対象（それが経験可能な対象であるならば）が主体を超越することを認める点で完全に一致している。とりわけデューイは、われわれの認知状態と認知過程の意味全体が、もろもろの独立した存在あるいは事実の制御と再評価に介入する仕方に存している、とほとんど嫌になるほど主張している。もしわれわれの観念が考慮に入れる独立した存在がないとすれば、また観念の働きによって変容される独立した存在がないとすれば、認識に関するデューイの説明は馬鹿げているだけでなく無意味でもあることになる。しかし、二人に対する批判者は、デューイとシラーが、完全に経験を超えているという意味で「超越的」な対象と関係とを論じることを拒否しているからという理由で、観念がみずからの対象はそこにあると明言しているのに、二人が観念の外部にある対象が経験の領域内に存在することまでも否定しているということ

などにおいて、「知る」というプロセスが徹頭徹尾具体的な経験から成り立っていると述べる。経験が時間的に展開されていくなかで、充足されたという経験が現われると、その経験は認識関係の終点、すなわち認識対象の直接的現前となり、そこからさかのぼって認識関係の出発点が措定される。

4）アメリカの哲学者で批判的実在論者のひとりであるプラット（James Bissett Pratt: 1875-1944）による区別を指す。プラットは *What is Pragmatism?*（New York: Macmillan, 1909）において、シラーやデューイの徹底したプラグマティズムとジェイムズの穏健なプラグマティズムとを区別した。プラットによれば、区別の要点は、穏健なプラグマティズムが観念の対象の独立実在を認める点である。プラットに関しては、本書第 7 章「プラット教授の真理論」で詳細に論じられる。

を示すために、そのような主旨の章句を二人の著作から見つけては槍玉にあげている[*3]。学識があり、一見したところ誠実であるようにも見える批判者が、自身の論敵の見解をこれほどまでに誤解するというのは信じがたいことであるように思われる。

[*3] カーヴェス・リード教授[5)]を氏の認識論に関する限りでプラグマティズムの会派に迎え入れることは私にとって喜ばしいことである。彼の力に溢れた著書 *The Metaphysics of Nature*, 2nd ed.（London: Adam and Charles Black, 1908）の Appendix A〔"Of Truth"〕を見よ。フランシス・ハウ・ジョンソン[6)]の *What is Reality?*（Boston and New York: Houghton, Mifflin, 1891）――私がこれを知ったのは本書の校正の最中だったが――は、最近のプラグマティストの見解に対する驚くべき予想が含まれている。つい最近登場したアーヴィング・E・ミラー[7)]の *The Psychology of Thinking*（New York: Macmillan, 1909）は、「プラグマティズム」という言葉こそ一度も使っていないが、これまでに出版されたなかで最も説得力のあるプラグマティズム文献のひとつである。参考文献を挙げるにあたって、私は 1909 年 4 月の *Quarterly Review* に掲載された H・V・ノックス[8)]の非常に鋭い論文を入れないわけにはいかない。

こんなにも多くの批判者たちを誤解に導いたもうひとつの原因は、おそらくシラー、デューイおよび私自身の談話の宇宙[9)]がそれぞれ広がりの異なるパノラマであり、しかも、ひとりが明確に前提する事柄が他方の側で

5）Carveth Read（1848-1931）：英国の哲学者。ジェイムズは上記の箇所を読み、リードを自分と同じ陣営に属すると考えた。他方、リードはジェイムズへの手紙（1909 年 11 月 2 日）で、自分は 40 年来のプラグマティストであると述べている。

6）Francis Howe Johnson（1835-1920）：アメリカの哲学者。ジェイムズは彼の書を常識的ヒューマニズムと見なした。

7）Irving Elgar Miller（1869-1962）：アメリカの教育者。

8）Howard Vincenté Knox（1868-1960）：英国の軍人、哲学者。ここで言及されている論文 "Pragmatism; The Evolution of Truth," *Quarterly Review*, 210（1909）, 379-407 は、ノックスの論文集 *The Evolution of Truth and Other Essays*（London: Constable, 1930）に再録された。この論文集にはプラグマティズムに関する論考がほかにも収録されている。さらにノックスには *The Philosophy of William James*（London: Constable, 1914）という著作もある。

9）「談話の宇宙〔universes of discourse〕」とは、19 世紀半ばに論理学で使われ始めた用語で、一定の場で話をする者たちによって存在が認められている存在者の全体を指す。

は暗黙の状態で一時的に放置されているだけなのに、読者のほうではそういう扱いを根拠に、その事柄が否定されていると考えてしまうことである。シラーの宇宙は〔三者のうちで〕最も小さく、本質的に心理的である。彼の出発点はたった一種類の事柄、すなわち真理主張だけであるにもかかわらず、彼は最終的には、それら真理主張が断言するもろもろの独立した客観的事実へと到達する。というのも、すべての主張のなかで最も成功裏に妥当とされるのは、そのような事実が存在するということだからである。〔これに対して、〕私の宇宙は一層本質的に認識論的である。私は出発点に客観的事実と主張という二つの事柄を置いたうえで、事実が存在する場合、どの主張がその事実の代用としてうまく働くのか、またどの主張がそうでないのかを示す。私は前者の主張を真なるものと呼ぶ。デューイのパノラマは、私がこの同僚を理解している限りでは三者のうちで最も広いが、その複雑な内容を私自身が説明することは差し控えよう。さしあたり、デューイも私と同様に、われわれの判断から独立した対象をしっかりと保持していると言えば十分である。もしこの発言が間違っているとすれば、それを訂正しなければならないのはデューイである。この問題に関して誰か他人の手による訂正はお断りする。

私は本書の以下の論述において、私の真理論に対する批判者、たとえばテイラー、ラヴジョイ、ガーディナー、ベイクウェル、クレイトン、ヒブン、パロディ、ソルター、ケイラス、ラランド、マントレ、マクタガート、G・E・ムーア、ラッドの各氏、その他の諸氏すべてを考慮に入れようとは思わない。とりわけ反プラグマティズムと銘打って面白い社会学的物語を発表したシンツ教授を扱おうとは思わない[10)]。こうした批判者のなかには、

10）ここで名前が挙げられている人々の略歴は以下のとおりである。

Alfred Edward Taylor（1869-1945）：英国の哲学者。“Some Side Lights on Pragmatism,” *University Magazine*（McGill）, 3（1903-1904）, 44-66; “Truth and Practice,” *Philosophical Review*, 14（1905）, 265-89; “Truth and Cansequences,” *Mind*, n. s. 15（1906）, 81-93 においてプラグマティズムを批判した。

Arthur Oncken Lovejoy（1873-1962）：アメリカの哲学者。“The Thirteen

自分たちが反論しようとしている論題を理解する能力がほとんど哀れなほど欠けている者もいるように思う。私は、彼らの抗議のほぼすべてについて本書のいずれかの箇所で回答を与えることができたと期待している。私の確信するところでは、すでにとんでもない分量になっている本書の論述

Pragmatisms," *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, 5（1908）, 5-12, 29-39 を書いた。この論文をめぐるジェイムズとのやり取りについては Perry［1935］vol. 2, 480-84 を見よ。

Harry Norman Gardiner（1855-1927）：イングランド生まれのアメリカの哲学者。"The Problem of Truth," *Philosophical Review*, 17（1908）, 113-37 は、1907 年にコーネル大学で開催されたアメリカ哲学会（American Philosophical Association, 以下 APA と略記）の大会における会長講演である。この大会にはジェイムズも参加し、「真理という語の意味」（本書第 9 章）を発表した。第 9 章訳註 14 を見よ。また、ジェイムズによるガーディナー宛の手紙（1908 年 1 月 9 日）は Perry, vol. 2, 484-85 を見よ。

Charles Montague Bakewell（1867-1957）：アメリカの哲学者。"On the Meaning of Truth," *Philosophical Review*, 17（1908）, 579-91 においてジェイムズの見解を批判した。ジェイムズはシラー宛の手紙（1908 年 1 月 4 日；Perry, vol. 2, 509）のなかで、この批判が「失敗している」と述べている。

James Edwin Creighton（1861–1924）：アメリカの哲学者。APA 創設に携わり初代会長を務めた。*Philosophical Review* に三本のプラグマティズム批判を寄せた。"Purpose as a Logical Category," 13（1903）, 284-97; "Experience and Thought," 15（1906）, 482-93; "The Nature and Criterion of Truth," 17（1908）, 592-605.

John Grier Hibben（1861-1933）：アメリカの哲学者。"The Test of Pragmatism," *Philosophical Review*, 17（1908）, 365-82 においてジェイムズの議論に言及している。

Dominique Parodi（1870-1955）：イタリア生まれの哲学者で主にフランス語で著述した。"Le Pragmatisme d'aprés Mm. James et Schiller," *Revue de Metaphysique et de Morale*, 2nd ser.（Paris: J. Vrin, 1930）, 48-49 という論文を書いた。

William Mackintire Salter（1853-1931）：アメリカの倫理文化に関する著述家。"Pragmatism: A New Philosophy," *Atlantic Monthly*, 101（1908）, 657-63 を書いた。ジェイムズの妻の義理の兄弟に当たる。

Paul Carus（1852-1919）：ドイツ生まれのアメリカの哲学者。プラグマティズムに関する三本の論文が *Monist* に掲載された。"Pragmatism," 18（1908）, 321-62; "The Philosophy of Personal Equation," 19（1909）, 78-84; "A Postscript on Pragmatism," 19（1909）, 85-94. ちなみに、仏教学者の鈴木大拙（1870-1966）は、*Monist* の編集長であったケイラスのもとで助手を務めていたこともあり、旧友の西田幾多郎（1870-1945）に当時のアメリカ哲学に関する最新情報を提供していた。

にこれ以上の重複を加えなかったことに対して、私は読者諸賢に感謝してもらえるはずである。

1909 年 8 月　ケンブリッジ（マサチューセッツ）、アーヴィング街 95 番地

第 2 章　インドの虎*1

*1 この章は、*Psychological Review*, vol. ii（1895）に掲載されたアメリカ心理学会会長講演[11)]からの抜粋である。

André Lalande（1867–1963）：フランスの哲学者。プラグマティズムに関する二本の論文を *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger* に寄せた。"Pragmatisme et pragmaticisme," 61（1906）, 121–46; "Pragmatisme, humanism, et vérité," 65（1908）, 1–26.

François Mentré（1877–1950）：フランスの哲学者。プラグマティズムに関する二本の論文を *Revue de Philosophie* に寄せた。"Note sur la valeur pragmatique du pragmatisme," 11（1907）, 5–22; "Complément à la note sur la valeur pragmatique du pragmatisme,"11（1907）, 591–94.

John McTaggart Ellis McTaggart（1866–1925）：英国の哲学者。彼による『プラグマティズム』の書評は、*Mind*, n.s. 17（1908）, 104–109 に掲載された。ジェイムズは本書第 13 章で、マクタガートの *Some Dogmas of Religion*（London: Edward Arnold, 1906）、とりわけその第 2 章における議論を批判している。ジェイムズはマクタガートの議論を、自身の『信じる意志』（*The Will to Believe*, 1897）への批判と見なした。マクタガートも、ジェイムズの名前こそ出さないものの、1898 年に『信じる意志』を読んで以来、ジェイムズを標的のひとりだと考えていたようである。

George Edward Moore（1873–1958）：英国の哲学者。"Professor James' 'Pragmatism'," *Proceedings of the Aristotelian Society*, n.s. 8（1907–1908）, 33–77 を書いた。

George Trumbull Ladd（1842–1921）：アメリカの哲学者、心理学者。アメリカ心理学会の創設を主導し、第 2 代会長を務めた。"The Confusion of Pragmatism," *Hibbert Journal*, 7（1908–1909）, 784–801 のなかにジェイムズの『プラグマティズム』への言及が見られる。また、『真理の意味』の書評を書き、これは *Philosophical Review*, 19（1910）, 63–69 に掲載された。

Albert Schinz（1870–1943）：スイス生まれの哲学者で、米国で教鞭をとった。*Anti-Pragmatisme*（Paris: Félix Alcan）という著作があり（英訳は *Anti-Pragmatism; an Examination into the Respective Rights of Intellectual Aristocracy and Social Democracy*, Boston: Small, Maynard, 1909）、ジェイムズと手紙のやり取りもあった。ジェイムズは彼に『真理の意味』を献本した。

11）"The Knowing of Things Together," *Psychological Review*, 2（1895）105–24. これはのちに *Collected Essays*（New York: Longmans, Green and Co., 1920）, 371–400 および *Essays in Philosophy*（Cambridge, Mass.: Harvard

【二種類の認識方法】

事物を知るには二つの方法がある。ひとつは直接的ないしは直観的に知ることであり、もうひとつは概念的あるいは表象的に知ることである。目の前にある白い紙のようなものは直観的に知られうるけれども、われわれが知るほとんどのもの、たとえばいまインドにいる虎やスコラ哲学の体系などは、表象的あるいは象徴的に知られるのみである。

【その一　概念的認識】

われわれの考えを固定するために、まずは概念的認識のケースを取り上げて、その認識が、われわれがここに座っているときに持つ、インドにいる虎に関するものであるとしてみよう。われわれがここでその虎を知っていると言うことは、精確には何を意味するのか。あんなにも確信をもって主張される虎についての認知は、厳密に言っていったいどのようなものとして知られる――シャドワース・ホジソン[12)]が用いた、洗練されてはいないが有益な言い回しを使うとすれば――のか。

たいていの人は次のように答えるだろう。虎を知るということは、いかに身体が不在であろうと、何らかの仕方でわれわれの思考に虎を現前させることであり、いいかえれば、われわれが有する虎の知識とは、われわれの思考に対する虎の現前として知られるということである、と。こうした

University Press, 1978), 71-89 に再録された。ここで述べられているアメリカ心理学会の大会は、1894 年 12 月 27・28 日にプリンストン大学でおこなわれたものである。

12）Shadworth Hodgson（1832-1912）：英国の哲学者。アリストテレス協会の初代会長を務めたこともあり、当時大きな影響力を持っていた。ジェイムズは、ある観念の意味や価値を、それがどのようなもの「として知られる〔known as〕」かに基づいて判定するという点を、自身のプラグマティズムを特徴づけるものとして強調する（P 30: 57）が、この言い回しはもともとホジソンの *Philosophy and Experience*（London: Williams and Norgate, 1885）p. 20 に見られるものである。ジェイムズは 1910 年 1 月 1 日のホジソン宛の手紙で、みずからのプラグマティズムの源が、友人のパースと、事物が何「として知られる」のかに関するホジソンの問いにあったと書いている。ホジソンとジェイムズの関係については Perry［1935］vol. 1, 611-53 を見よ。

不在における特異な現前からは、たいてい大きな謎が生まれるものである。そして、スコラ哲学――これは衒学的になった常識にすぎない――によれば、この謎は、われわれの思考における虎の志向的存在と呼ばれる特異な種類の存在として説明される。少なくとも人々は、虎を知るということは、われわれがここに居ながらにして心が虎のほうを指し示すことを意味すると言うだろう。

しかしこのような場合に、指し示すとはどのような意味なのか。ここで、指し示すということはどのようなものとして知られるのか。

この問いに対して、私ははなはだつまらない答え――常識とスコラ主義の先入観に反するばかりか、私がこれまでに読んだほぼすべての認識論的著者の先入観にも反するような答え――を与えざるをえない。その答えとは、簡単に表せば以下のものである。われわれの思考による虎の指し示しが何として知られるかと言えば、それは単にもっぱら、思考に続いて生じ、もしその思考を最後まで辿るならば、その虎に関する理念的もしくは実在的文脈へ、あるいはその虎の直接的現前へさえも、調和的につながっていくであろう心的連合物と運動的帰結の過程として知られるのである。〔より詳しく述べるなら、〕それ〔われわれの思考が虎を指し示すこと〕は、もしジャガーが虎として示されたならばわれわれがそのジャガーを拒否し、もし本物の虎が示されたならばわれわれが同意することとして知られる。それは、実在の虎について真である他の命題と矛盾しないあらゆる種類の命題を口に出すわれわれの能力として知られる。それは、もしわれわれが虎をきわめて真剣に考えるならば、虎をじかに直観することに終着するであろうわれわれの行為――たとえば、虎狩りのためにインドへ旅行に出かけ、やっつけた縞模様の悪党の皮を大量に持ち帰ること――としてさえ知られるのである。これらすべての場合において、それ単独で考えられたわれわれの心的イメージのなかにはいかなる自己超越性もない。心的イメージはひとつの現象的事実であり、虎はもうひとつの現象的事実である。そして、もし諸君が連結した世界が存在することをひとたび認めるならば、

心的イメージが虎を指し示すことは、まったくありふれた経験内の関係だということになる。要するに観念と虎は、それ自体で見るとこれ以上ないほどにばらばらで分離している――ヒュームの言葉を使うならば――のであり、指し示すことがここで意味しているのは、自然が生み出すいかなるものとも同じくらいに外的で偶然的な作用なのである[*2]。

[*2] 畑にある石は、別の畑にある穴にいわば「適合する」かもしれない。しかし、「適合する」という関係は、誰かがその石を穴のところへ運び、そこに落としてみない限り、そのような行為が起こるかもしれないという事実に対するひとつの名前にすぎない。いまここにおける虎についての認識に関しても同様である。この認識も、生じるかもしれない、連合的で〔実物の直接的知覚において〕終結するさらなる過程に対する先読みした名前にすぎないのである。

いまや諸君は私に同意して、表象的認識においては特別な内的謎などまったくなく、あるのはただ、思考と事物を結びつける物理的あるいは心的媒介物からなる外的な連鎖だけであるということを認めてくれるだろう。ある対象を知るとは、ここでは、世界が供給する文脈をとおってその対象へと至ることにほかならない。以上のすべてのことは、私の同僚であるD・S・ミラーによって、昨年のクリスマスにニューヨークでおこなわれた会合で大変示唆に富む仕方で述べられており、ときとして不安定になる私の意見をあらためて確定してくれたことについて、彼に感謝を申し上げたい[*3]。

[*3] *Philosophical Review*, July, 1893 および Nov., 1895 に掲載された、真理と誤謬、内容と機能に関するミラー博士の諸論文[13)]を見よ。

13）Dickinson Sergent Miller（1868-1963）：アメリカの哲学者。ミラーは “The Confusion of Content and Function in the Analysis of Ideas” という論文を、1893 年 12 月にコロンビア大学で開催されたアメリカ心理学会の第二回年次大会で発表した。この論文はタイトルを変更し、“The Confusion of Content and Function in Mental Analysis,” *Psychological Review*, 2（1895）, 535-50 として掲載された。ジェイムズが挙げているもう一本の論文は、“The Meaning of Truth and Error,” *Philosophical Review*, 2（1893）, 408-25 である。ジェイムズはどちらの論文も *Philosophical Review* に発表されたかのように書いているが、これは誤りである。

【その二　直接的認識】

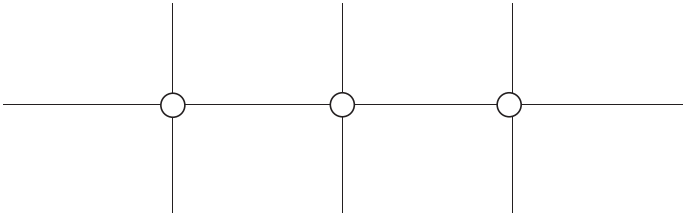
続いて、対象との直接的あるいは直観的面識〔intuitive acquaintance〕の場合に移り、その例として目の前の白い紙を取り上げてみよう。思考の素材と事物の素材は、ここでは本性において区別しがたいほどに同一である。というのも、われわれはその紙を一瞬前に見たのだし、思考と事物とのあいだにあり、両者を分離する媒介物あるいは連合物のような文脈は存在しないからである。ここには「不在における現前」や「指し示し」などなく、むしろ思考による紙の全面包囲がある。そしてこの場合、〔この紙を〕知るということの説明は、思考の対象が虎である場合とまったく同じというわけにはいかない。これに類似した直接的面識の状態は、われわれの経験の至るところに点在している。われわれの信念はつねにどこかで、この紙の白さや滑らかさ、四角さのような究極的所与にどうしても依拠している。そうしたもろもろの質が存在者の真に究極的側面なのか、あるいは、われわれがさらによく知るようになるまで固執される一時的な仮定にすぎないのかは、われわれの現在の探究にとってまったくどうでもよいことである。それが信じられる限りは、われわれは対象に面と向かっている。では、このような種類の対象を「知る」ということで、われわれは何を意味するのか。なぜなら、これ〔対象の知覚的現前〕はまた、われわれが先に述べた虎を知る方法でもある――もしわれわれが持つ虎の概念的観念の終結が、われわれをその虎の巣穴〔とそこにいる虎の知覚的経験〕にまで導くことによるものだとすれば――からである。

この講演はあまり長くなってはいけないので、私は自分の回答をごく手短に述べなければならない。まず次のように言おう。白い紙やわれわれの経験のその他の究極的所与がほかの誰かの経験にも入り込むと考えられ、しかもわれわれがそれを知る際に、自分の経験においてと同様に他人の経験においてもその所与を知ると考えられる限り、また他方で、そうした所与が、われわれ自身のいまは不可能な別の経験によっていつの日か白日のもとに曝されるかもしれない隠れた分子の単なる仮面であると考えられる

限り、その限りで、事情はまたもやインドの虎の場合と同じである――知られる事物は不在の経験なので、それを知ることの本領は、世界が供給する媒介的文脈をとおって円滑にその事物へと移行すること以外にはありえない。だが、仮にその紙に関する私秘的な視覚がほかのあらゆる出来事から抽象されて考えられる――あたかもそれが単独で宇宙を構成するかのように（しかもこの想定は、そうでないということが理解しがたいので、十分に可能であろう）――ならば、その場合見られている紙とそれを見ることとは、適切には所与、現象、あるいは経験と呼ばれる一個の不可分な事実に対する二つの名前にすぎない。紙は精神のうちにあり、精神は紙を取り巻いている。なぜなら紙と精神は、その一個の経験が、みずからを部分として含むより広大な世界に取り入れられ、その経験の結合が異なる方向に辿られるとき、一個の経験に対してあとからつけられる二つの名前にすぎないからである[*4]。そうであれば、直接的あるいは直観的に知ることは、心的内容と対象が同一だということである。このような定義は、われわれが表象的認識に与えたものとはまったく異なっている。けれども、どちらの定義も、哲学者と常識人双方が抱く認識という観念の本質的な部分である〔と思い込まれている〕自己超越性とか不在における現前といったような謎めいた概念を含んでいないのである[*5]。

[*4] これによって意味されているのは、「経験」が、二つの巨大な連合体系、すなわち経験するものの心的歴史の体系と世界に属する経験される事実の体系のどちらとも関連づけられうるということである。この経験は、これら二つの体系のいずれの部分でもあり、実際、これらの体系の交差点のひとつと考えられてもよい。〔これを図示すれば以下のようになる。〕ひとつの垂直線はひとつの心的歴史を表すが、同一の対象Oは、別の垂直線によって表される別の人の心的歴史にもまた登場する。こうして対象Oはひとつの経験の私秘的特質であることをやめ、いわば共有された事物、あるいは公共的事物となる。われわれはOの外的歴史をこのように辿り、それを水平線によって表すことができる。［対象Oは垂直線の他の点においては表象的にも知られるし、再び直観的にも知られる。したがって、その外的歴史の線は、〔本当は〕輪の形や方向が定まっていないように書かれなければならないだろう。けれども私

は簡潔さを優先させ、直線で描くことにする。］しかし、いかなる場合にせよ、この一組の線に現われるのは同一の素材なのである。



*5［読者は、ここで述べられたことが素朴実在論ないしは常識的見地から書かれたものであり、観念論的論争の喚起を避けていることを認めるだろう。］

第 9 章　真理という語の意味*1

*1 1907 年 12 月にコーネル大学でおこなわれたアメリカ哲学会の大会での発表[14)]。

【真理に関する実在論的説明】

真理に関する私の説明は実在論的であり、常識が想定する認識論的二元論に従っている。私が諸君に「その事物は存在する」と言うとしよう――これは真であるか、それともそうではないか。どうして諸君がそれを言えるだろうか。私がこの言明の意味をさらに展開してみせるまでは、それが真なのか偽なのか、それとも実在とまったく無関係なのかは決定されない。しかし、諸君がいま「それはどんな事物なのか」と尋ねるならば、私は「机だ」と答えるし、諸君が「それはどこにあるのか」と言えば、私はある場

14）この発表は、「真理の意味と基準」と題された討論においてジェイムズがおこなったもので、ほかにクレイトン、ベイクウェル、ヒブン、ストロング（Charles Augustus Strong［1862–1940］：批判的実在論者のひとりで汎心論者。シカゴとコロンビアで教えたあと、長くイタリアに住み、そこで大半の著作を書いた）が発表し、プラグマティズムの真理論に関する議論がおこなわれた。各自の発表内容の要旨は、APA 事務局長が作成した大会報告論文（“Proceedings of the American Philosophical Association: The Seventh Annual Meeting, Cornell University, December 26–28, 1907,” *Philosophical Review*, Vol. 17, No. 2（1908）, 167–90）に掲載されている（180–86）。

所を指さす。諸君が「それは物質的に存在するのか、それとも想像のなかにだけ存在するのか」と問うならば、私は「物質的に存在する」と返答する。もし私がさらに、「私が意味しているのはあの机だ」と言い、その際私が記述したとおりに諸君が見ている机をつかんで揺さぶるとしたら、諸君は私の言明が真であると躊躇せずに言うだろう。しかるに、諸君と私はここで交換可能である。われわれは立場を入れ替えることができる。つまり、諸君が私の机を保証するのと同じように、私も諸君の机を保証できるのである。

【真理と働き】

われわれ二人のどちらからも独立した実在というこの概念は、日常の社会的な経験から引き出されたものであり、プラグマティストによる真理の定義の基礎である。いかなる言明であれ、それが真だと見なされるために一致しなければならないのは、何かこのような実在である。プラグマティズムは「一致」の意味を定義して、現実的であれ可能的であれ、一定の「働き」であるとする。したがって、「机は存在する」という私の言明が、諸君によって実在的だと認識される机について真であるためには、その言明が私を、諸君の〔見ている〕机を揺さぶることや、諸君の精神にその机を思い浮かべさせるような言葉で説明すること、さらには諸君が見ている机に似たものを描くこと等々へと導きうるのでなければならない。このような仕方で働いて初めて、その言明があの実在と一致すると述べることに意味があるのだし、このようにして初めて、私は諸君が私の言明を確証するのを耳にして満足するのである。確定的な何かを指示することと、この何かに対するある種の適応――これは一致と呼ぶにふさわしいものである――は、こうして、「真である」とされる私のあらゆる言明の定義における構成要素である。

働きという概念を使うことなしには、諸君は指示も適応も把握することはできない。その事物とはそれであるとか、その事物は何であるかとか、

その事物は（その何性を有するすべての可能的事物のうちの）どれであるかといったことは、ひとえにプラグマティックな方法によってのみ決定可能である。「どれ」とは、特定の対象を指し示すこと、あるいはほかの仕方でその対象を選び出すことの可能性を意味する。また、「何」は、その対象を考えるために用いる本質的側面をわれわれが選択することを意味する（そしてこれは、デューイがわれわれ自身の「状況」と呼ぶものにつねに相対的である）。さらに「それ」は、信念の態度、その実在を認識する態度に関するわれわれの想定を意味する。「真」という語がある言明に適用された場合に意味することを理解するには、以上のような働きに言及することが間違いなく不可欠である。もしわれわれがこの機能を除外するならば、間違いなく認知関係の主観と客観は――たしかに両者は同じ宇宙にあるにしても――、漠然としており、〔互いを〕知らず、相互の接触や媒介を持たずに宙に浮いてしまうのである。

にもかかわらず、われわれの批判者たちはこの働きを非本質的だと呼ぶ。彼らが言うには、いかなる機能的な可能性もわれわれの信念を真に「する」ことなどなく、信念は本来的、積極的に真であり、ちょうどシャンボール伯[15)]が生まれながらに「アンリ 5 世」であったように、生まれながらに真なのである。これとは反対にプラグマティズムの主張では、言明や信念が批判者の言うように不活発で静的に真であるのは、ただ儀礼的に〔by courtesy〕そうであるにすぎない。すなわち、そうした言明や信念は実際上真として通用するのではあるが、しかし、言明や信念の機能的な可能性を参照しないならば、諸君はそれらを真と呼ぶことによって自分が意味しているものを定義できない。この機能的な可能性は、実在に対する信念の関係――「真理」という名前が適用されるのはこの関係に対してである――に、信念の論理的内容全体を与える。この可能性がなければ、信念と

15）シャルル 10 世の孫で、フランス・ブルボン家最後の王位継承候補だったアンリ・ダルトワ（1820-83）のこと。ブルボン王朝の支持者たちからはアンリ 5 世と呼ばれた。

実在との関係は単なる共在〔coexistence〕や裸の一緒性〔withness〕に留まってしまうのである。

【徹底した経験論と真理論】

以上述べてきたことは、私の著書『プラグマティズム』における真理を扱った講〔第 6 講〕の本質的内容の再論である。シラーによる「ヒューマニズム」の教説と、デューイの『論理学的理論の研究』〔1903〕、そして私自身の「徹底した経験論」は、いずれも、現実における、あるいは想定可能な水準における「働き」としての真理という上記の一般的概念を含んでいる。しかし、これらの著作と教説がこの「働き」という一般的概念を包摂しているのは、はるかに広範な諸理論――究極的本性と構成において「実在」全般とは何であるかという概念を規定することを最終目標とする諸理論――の単なる一項目としてであるにすぎないのである。

第 10 章　ユリウス・カエサルの存在[*1]

*1 この論文は最初、「真理 vs. 真理的であること〔“Truth” Versus “Truthfulness”〕」という題で *Journal of Philosophy*[16] に掲載された。

真理についての私の説明は純粋に論理的であり、ただ真理の定義にのみ関係している。私の主張は、「真である」という語がある言明に適用された際に何を意味するかは、その言明の働きに関する概念に訴えることなしには語られえないということである。

【単純な宇宙の設定】

われわれの観念を固定するために、二つの事物だけでできている宇宙、すなわち、死んで土になった皇帝カエサルと、「カエサルは本当に存在した」と述べている私という二つの事物だけでできている宇宙を考えてみよう。

16）*Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 5, No. 7 (1908), 179-81.

たいていの人は、私の発言によって真理が語られていると素朴に考え、私の言明がもう一方の事実〔カエサルが存在したこと〕を一種の遠隔作用によってじかに把握したのだと言うだろう。

けれども私の言葉はそんなにも確実にあのカエサルを指示しているのだろうか。あるいは、そんなにも確実に彼の個別的属性を内包しているのだろうか。この「真である」という形容語が理念的に意味しうるものを完全な程度にまで拡充するには、私の思考はみずからの特殊な対象に対して十分に明確で曖昧さのない「一対一関係」を持つべきである。この指示関係は、先に想定された非常に単純な宇宙のなかでは確証されない。もしそこに二人のカエサルがいるならば、われわれはどちらが意味されているのか知るすべがないだろう。こうして真理の諸条件は、この談話の宇宙においては不完全であるように思われるので、この宇宙は拡張されなければならない。

【宇宙の拡張方法の対照】

〔このような必要性に直面して、一方で〕超越論者[17]は、一切の事実を所有するがゆえにそれらを君主のように相互に関係づけることができる絶対的精神に訴えることによってこの宇宙を拡張する。もしこの精神が、私の言明はあの同じカエサルに関連するべきである、また、私の考えている属性はカエサルの属性を意味するべきであると欲するならば、その意向はこの言明を真にするのに十分である〔とされる〕。

他方で、私がこの宇宙を拡張する方法は、二つの根源的な事実のあいだに有限な媒介物を認めることによってである。カエサルはもろもろの効果を持っていた。そして、私の言明はもろもろの結果を持っている。もしこれらの効果が何らかのかたちで合流するならば、純粋な遠隔作用として捉えられたときには、あまりに漠然と、しかも不可解に宙に浮いてしまうよ

17）「超越論者〔transcendentalist〕」とは、真理を、言明と絶対者の意識の対象である実在との対応であると考える観念論的な哲学者を指す。

うに思われた認知関係が明確になるための具体的な媒介物と土台が用意されるのである。

実在したカエサルは、たとえばある草稿を書いた。私はその実在する翻刻を見て、「私の意味するカエサルとは、まさにこの草稿の著者である」と言う。このようにして私の思考の働きは、みずからの内包的および外延的意義の両者をより十全に決定する。私の思考はいまや、実在したカエサルとそれ自身無関係ではなく、また私の思考がカエサルについて示したものが虚偽でもないことを明らかにする。〔これに対して、〕絶対的精神は、私がこのように宇宙の媒介物をとおしてカエサルに向けて働きかけるのを見て、こう言うかもしれない。「そんな働きなど、絶対的精神である私がその言明は真だと言うことによって意味したものを、細かく示しているにすぎない。私は、その二つの根源的な事実のあいだの認知関係に対して、ちょうどそうした類の具体的媒介物の連鎖が存在する、あるいは存在しうるということを意味すべきだと命令する」と。

【真理、効果、働き】

けれども、その連鎖は、われわれがその真理の論理的条件を規定しつつある言明に先行する諸事実と、それに後続する諸事実とを含んでいる。こうした事情は、真理と事実という語を同義語として扱う一般の使用と結びつけられて、私の説明を誤解へと導いた。「すでに 2000 年を経た真理であるカエサルの存在が、その真理性に関して、いま起ころうとしている何事かに依存するなど、どうしてありうるだろうか。私のそれについての承認が、その承認自体の効果によって真にされることなど、どうしてありうるだろうか。もろもろの効果は、なるほど私の信念を確証するかもしれない。けれども、〔そんな効果などなくても〕その信念はカエサルが本当に存在したという事実によってすでに真にされていたのである」。このように真理と事実を混同して尋ねられるのである。

よろしい、そうだとしよう。なぜなら、もしカエサルがまったく存在し

なかったとすれば、言うまでもなく、彼に関する何らの積極的真理もありえないだろうからである。けれどもここで、積極的に完全に真であると確認されたものとしての「真」と、単に「実際的に」、省略的に、儀礼的に、すなわち積極的には無関係ないし非真実というわけではないという意味においてのみ真であるものとしての「真」とを区別してほしい。また、カエサルが存在した〔という事実〕は、現在のある言明を真にするかもしれないのと同様に、ある言明を実際に虚偽、あるいは無関係にするかもしれないこと、そしていずれの場合も、カエサルが存在したこと自体は変化する必要がないということを思い出してほしい。その事実が与えられるとしても、真理や非真理もしくは無関係もまた与えられるべきかということは、その言明自体から生じるもの〔すなわち言明の実際的帰結〕にかかっている。プラグマティズムが主張するのは、もし諸君がその言明の関数的働き〔functional workings：ある言明という入力からどのような行為や効果という出力があるか〕を考慮に入れないままにしておくならば、そのあるものを十全に定義することは不可能だということである。真理は実在との一致を意味するけれども、その一致の様式は一致関係の主題となる項〔の働き〕だけが解決することのできる実際的な問題なのである。

註記　もともとこの論文には、主知主義者の反論を緩和することを目的とした二つの段落がこのあとに続いていた[18)]。そのなかで私は次のように述べた。諸君は「真〔true〕」という語をあんなにも愛するのだから、またわれわれの観念の

18）ジェイムズが元の論文にあった段落を削った理由のひとつは、デューイの影響であると考えられる。1909年2月24日のジェイムズ宛の手紙（Perry［1935］vol. 2, 529-30）で、デューイは当該箇所に関して次のような不満を述べている。ジェイムズは、「真理」と「真理的」という区別が「ほとんど純粋に学問的なもの〔にすぎない〕」と言っているが、これは反対者に付け入る隙を与えてしまうのではないか。しかも、二つの語の区別を「学問的なもの〔にすぎない〕」と言っておきながら、次の段落では「真理的」のほうがより重要だと述べ、あたかもそこに優劣があるかのように語るのはおかしいのではないか、と。ジェイムズが二つの段落を削り、註記というかたちで穏当な内容に要約しなおしたのは、こうしたデューイの批判を受けたからだと推測される。

具体的働きをあんなにも蔑視するのだから、「真理〔truth〕」という語を、諸君があれほどまでに気にかけているところの跳躍的で理解不能な関係のために取っておきなさい。そうすれば、私の側では、みずからの対象を理解可能な意味において知る思考を、「真理的〔truthful〕」〔という別の言葉〕で表すことにしよう。

たいていの申し出と同じく、これも鼻先であしらわれてしまったので、私は自分の寛大さを後悔しつつそれを引っ込めることにした。プラット教授[19]は、彼の近著において、事実のいかなる客観的状態をも「真理」と呼んでいるし、しかも「真理性〔trueness〕」という語を、私が提案した「真理」の意味で用いている。ホートリー氏[20]（以下のp. 150〔第14章「二人の英国の批判者」〕を見よ）は、「正しさ〔correctness〕」という語をこれと同じ意味で用いている。曖昧な単語にまつわる一般的弊害は別にしても、もし「真理」という語が公式にわれわれの信念と意見の一性質としての身分を失い、「事実」に対するテクニカルな同義語として認められるようになるならば、われわれは実際、すべての希望を放棄してもよいだろう。

19）プラットについては「序文」訳註4を見よ。*What is Pragmatism?* pp. 51–52において、プラットは真理という語の一般的用法を三つ挙げている。(1)「実在」の同義語、(2)知られている「事実」あるいは検証され容認された信念の同義語、(3)観念に属しており、観念を真（true）にする関係または質。プラットによれば、(1)は絶対主義者に見られる用法であり、混乱を招くのでプラグマティストの批判の的になった。しかし、(2)は正当なものである。(3)は「真理性〔trueness〕」と呼ばれ、プラットはこれを「ある人が考えている対象が、考えられるとおりにあるということ」（p. 67）と定義している。

20）Ralph George Hawtrey（1879–1975）：英国の経済学者。“Pragmatism,” *New Quarterly*, 1（1908), 197–210のなかでジェイムズを批判した。ジェイムズは本書第14章において、この論文をラッセルの論文とともに取り上げ、応答している。